



戦国時代、北条氏の治世のもと、城下町として発展



歌川広重「東海道五十三次 小田原 酒匂川」



清閑亭(せいかんてい)



なりわい交流館



松永記念館



皆春荘(かいしゅんそう)



小田原駅東口お城通り地区で再開発が進む

# 小田原、 魅力ある都市 としての軌跡



城下町、宿場町、そして別荘地として多くの魅力を放った小田原市は、そのポテンシャルを礎に県西地域の中心を担う都市として歩みを進めています。

## 都市の息吹。城下町、 そして宿場町の形成

戦国時代における関東随一の城下町として、にぎわいを見せた小田原市。その発展の契機となったのは、後北条氏の小田原城入りでした。北条氏は商人や職人など多くの人材を上方から招き、産業を興しました。まちは活気にあふれ、城下には水路(小田原用水)もひかれ、高度な都市機能を有していたとい

ます。絵画や茶の湯などの文化が醸成されたほか、甲冑などの武具の生産や染物など、ものづくりの技術が育成・継承される礎となりました。

江戸時代に入り、小田原は東海道五十三次屈指の宿場町として全国に知られるようになります。1601(慶長6)年に成立した小田原宿は、江戸を出てから東海道を西へ二十里余、品川宿から数えて9番目にあたる宿場町でした。日本橋を出立した人の多くが、難所「箱根山」

を越えることに備えて、小田原宿を利用したといわれています。商人の家が建ち並び、多くの旅人の往来で活気に満ちていました。

## 明治の鉄道開通 別荘地として開花

明治維新を経て、1887(明治20)年に新橋と国府津間で東海道線が開通します。鉄道の開通に加え、温暖な気候、

清浄な空気、美しい景観という小田原の魅力が評判となり、別荘地や保養地として注目を集めるようになりました。伊藤博文や大隈重信、山縣有朋(やまがたありとも)など、近代日本の幕開けを担った政財界人や軍人が、続々と居を構えています。また、北原白秋や谷崎潤一郎など、日本近代文学を代表する文人たちも、こぞって小田原の地に移ってきました。

彼らの邸宅の一部や記念碑などが現

在も市内に残されており、当時の面影が偲ばれる風情あるまちなみを形づくっています。

## 都市の成長は続く 新しい未来へ

城下町としての礎を築いた戦国時代、宿場町としてにぎわいを見せた江戸時代、そして日本の近代史を代表する人びとが集まり、交流した明治・大正・昭和時

代。それぞれの時代において、小田原はまちの資源を生かした独自の発展を続けてきました。

そして今、都市整備や新たなにぎわい創出に向けた取り組みなど、未来を見据えた動きが始まっています。県西の中心都市として、50年、100年と発展し続け、多くの人びとが行き交い、魅了される都市であり続けるために、小田原は今も着実に歩みを進めています。